

全壊住居わずか2棟

倒壊防いだ伝統工法

震度6強の強い揺れにもかかわらず、栄村で全壊した住居は2棟にとどまり、死者はなかった。傾いた家はあるが、潰れて中に入れない家はほとんど見あたら

ず、伝統的工法で造られた家が被害を最小限に食い止めた要因の一つとみられる。

2007年の新潟県中越沖地震でも被災地の建築物倒壊を調査した、県建築指導課の湯本和正課長補佐は「中越沖地震など同レベルの地震と比較して、被害は小さかった。地盤の違いなどの様々な要因はあるが、伝統的な工法が倒壊の少なさにつながったのでは」と

分析する。

栄村は1945年に7・85級の「日本最高積雪」を記録した豪雪地帯。村内の戦前からの家屋は、大黒柱に代表されるような、雪の重さに耐えられる太い柱や梁が使用され、柱と柱の間に板を何段も横に通して組んでいく伝統的な「貫工法」で造られている。木組みして土で塗り固めて壁を作り、この壁全体で家を支える構造となっており、通常の木造家屋より強度があるという。こうした伝統工法は戦後に新築された住宅ではほとんどない。

また、屋根は雪下ろしがしやすく軽量のトタン屋根が多い。湯本課長補佐は「手間や費用がかかる貫工法が出来る職人は少なくなりましたが、今回で再び評価される

のでは」と話す。

「京大防災研究所」(京都府宇治市)の川瀬博教授(地震工学)も貫工法の耐震性を評価する。川瀬教授によると、柱の接合部に金具を使う現代の住宅は揺れると金具の部分に力が集中し、柱が割れてしまうが、貫工法は、柱を凹凸にくりぬいて接続しており、すき間に木製のくさびを打つなどし、金具はほとんど使用しない。地震の際は、家全体が大きく揺れるが、そのことで逆に力を逃がし、倒壊を防ぐ。

川瀬教授は「今は耐震性という堅い建物を、という考え。これとは逆の伝統的工法の良さも見直されている」と話す。

また、雪が少なくなっただけで、雪が少なくなくなった時期だったことも被害を抑

えた。厳冬期は村内の住宅の屋根には1〜2メートルが積もる。今回の地震発生時、村内の積雪は約1メートルあったが、屋根の上に雪はあまりなく、建物にかかる重さが小さかったという。島田茂樹村長は「地震が真冬でなくて良かった。雪の多い真冬だったらもっと倒壊していたかもしれない」と話している。

雪で一時帰宅中止

前日に引き続き、17日も雪模様となった栄村。午前9時現在の積雪は185センチ(消防調べ)で、15日の同じ時間に比べ30センチ以上増えた。この影響で、17日の一時帰宅は危険があると判断、全地区で中止となった。

一方で村は、18日、一時帰宅時間を午後1時〜午後5時の4時間に拡大する。これに合わせて、北信保育園は18日から臨時開設し、帰宅時の受け入れを行う。島田茂樹村長は、19日以

花粉情報



降も一時帰宅時間を半日程度に延長していく方針を示した。

これは、17日午前0時から12時間に地震が3回となるなど、余震が減ってきたことや、新潟大災害復興科学センターと協議した結果。島田村長は「連休で村外の家族や親戚も手伝いに来ると思う」と話した。

一方で、水道の復旧は見通しが立っていない。村の簡易水道は15か所の水源から給水しているが、現在のところ問題なく給水されているのは1か所。残りは配水池への水の流入がなかったり、漏水があったりするなどして、復旧には時間がかかる見通し。大量の積雪で配水管などの破損状況が詳しく把握できないことも大きいという。

長野